ジェンダーフリースペース通信 2号
GENDER FREE PRESS

〒195-8585
東京都町田市金井町2160
和光大学G112（G棟1階）
044-989-7777　内4112
www.wako.ac.jp/gender/

モノに見る女／男　開催

去る4月21日から25日の5日間大学付属図書館梅根記念室にて資料展示『モノに見る女／男』を開催しました。初めての展示企画ということで、かなり不慣れな点もありましたが、新学期間もないキャンパスで「ジェンダー？？？」な新入生にも楽しんでもらえたでしょうか。

男女という性別の二分法（ジェンダー）は私たちの生活の隅々にいきわたっています。私たちが使うモノにもしばしばジェンダーの色付けがされています。モノとの出会いをつうじて、人は自分のジェンダーを意識します。見慣れた、ありふれたモノからジェンダーについて語り合うきっかけにしてもらえればと思い、企画しました。

とは言え、展示自体は初めての作業なので教職員、学生共に半日がかりの大仕事でした。また展示品はそのほとんどが有志による提供と、大勢の皆さんの協力によってなんとか開催を迎えることができました。

夫婦茶碗からハローキティ・ガンダムまで幅広いジャンルのものが集まったこの企画。今回の経験を活かして、来年も資料展示を行う予定です。見逃した人は是非立ち寄ってみてください。

展示会場入口からの展示風景

学童期の服装として学生服は目を引きました

中：懐かしいおもちゃが並びました
下：ネクタイや割烹着など色や柄に特徴が出ています

ジェンダーを語るタベーモノとの関係で

展示を見て感じたことを語り合う場を設けようと、展示期間中の4月24日の午後4時より掲示板前の小広場にて開催しました。

会場が往来のすぐそばということもあり、新しいことに興味津々の新入生から院生、教員とを交えて日没まであっという間でした。

それぞれの展示の感想に始まって、学校の制服についての賛否や意見、海外からの研究生からは日本にはない珍しい夫婦モノについての紹介、ジェンダー標識（トイレのマークなど）のバリエーションや特徴の文化性について、など。

参加者の日ごろ感じているさまざまな事柄に話題は広がり、軽食をつまみながらの楽しい語らいの場となりました。

『戦争をジェンダーの視点で考える
―「平和」「安全」「暴力」の意味を問う』

船橋　邦子

5月28日ジェンダーフリースペースにおいて本年度より本学教員の船橋邦子さんを迎えて研究会を開催しました。船橋さんの専門は開発とジェンダー、地域政策などをテーマにアジアでのNGO活動をしてきており、和光大学では「NGO活動入門」「地域政策論」を担当しています。今回は「戦争をジェンダーの視点で考える」ということで現在の状況を支えている戦争システムとそこからの脱軍事化の方向性に焦点を当てた内容となりました。

今までのアメリカがいかにして相手を征服し、そして自分の目的を達成し自分たちのしたことが常に正義の大義名分の下で行われてきたか。アメリカの兵器を頂点とする軍事秩序体制、ブレトンウッズ機構（1980年の自由市場経済あるいは自由貿易というのはより多国籍企業にとってプラスになるような形でより強化された）、人権や民主主義の名の下での支配など、パックス・アメリカーナが冷戦の終結によって全面に開花する。まさに家父長制と資本制と軍事化の三位一体進んでいくというような状況である。これは新自由主義経済や教育改革などの下、日本においても同様の方向に進んでいる。

この状況に展望を見出せるのはジェンダーの視点、女性たちの力が必要である。男女共同参画へのバックラッシュというので、新自由主義的なグローバル化や自由競争のもと、弱肉強食の競争原理の中で平等の規制緩和が進むと、一番厳しい犠牲にあうのは非正規雇用や低賃金という状況にある女性だ。また、脱軍事化していくために軍事化を支える女性性と男性性からの解放をすると同時に、戦争の正当化をすることの意味を問い直しべきである。

市民のグローバル化や安全保障、地域分権などにも話が及び、今の状況に声をあげていく重要さを強調して会は終わりました。

ジェンダーフリーシネマパレード開催

今年で二回目で、早くも一部学生には定着しつつあるシネマイベント。今年は6月の一ヶ月間、1週間に1本の計4本の作品を取り上げました。

映画を通じてジェンダーを感じたり、考えたりしてみようということで始まったこの企画。中にはただ単に楽しいだけの映画から中々ディープな映画まで幅広く取り上げています。最近は取り上げたい映画が目白押しで、ますます充実していきたいと思います。

〈 上映作品 〉

『ヘドウィグアンドアングリーインチ』
何が男で何が女かよくわからなくなった。／男が女、女が男を好きになるのが当たり前なのも、考えてみればふしぎなのかなぁ。／音楽がかっこよかった（歌が印象的だった）／よく分からなかったが、考えさせられた

『彼女を見ればわかること』
全部が少しずつリンクしていて、楽しかった。／様々な女性の生き方があって面白かった。／とてもリアルで、女性の心の奥が描かれていたと思う。

『同級生』
学校や社会全体を写していて、色々な点で面白かった。／身近にないテーマだったので新鮮でした／ラストが納得できなかった／確かにこれも愛だよ。切なくて泣きそうになった。

『ハッシュ！』
人間て複雑で面白いな、と思った。／主人公を初め理解できなかったけど、あーいう形もありなのかなと思った。何が正しい、とか強制されるのはおかしいと感じた。

（アンケートより抜粋）

今後も定期的に企画していこうと考えています。ただ単に映画が好きな人からジェンダーに関心がある人まで気軽に参加して楽しんでもらい、考えるきっかけになればと思います。また、お勧めの映画がありましたら、次回の参考にさせてもらうので是非お知らせください。

アイヌ民族・国民国家・ジェンダー

村井紀

アイヌ民族の女性歌人をゼミで取り上げようと学生と一緒に調べはじめたところ、困った。要するに「文学」の枠組みではでてこなかったからである。

戦前、中野重治(*1)が獄中、歌集『若きウタリ』(1931)を読み「パルチザンの歌」と評し、民族の抵抗歌人として高く評価したバチェラー八重子(1884〜1962)という宗教家で歌人のことである。彼女は、若いころに英国を旅し、また"少女作家"時代の宮本百合子(*2)と知己であり、その数奇な運命はテレビ番組や小説にもなり、歌集と同名の写真集もある。

実は、彼女のことは"民衆史"(『近代民衆の記録(5アイヌ)』)には登場し、さらにほとんどの「女性史」・「女性史辞典」類には載っている。それもしばしば北海道を代表する女性として記述され、むろん短歌も紹介されている。(これらは七・八〇年代の民衆史ブーム・ウーマンリブ期の産物で、高い"評価"は、おそらく中野の評価から来ている。)

ところが、このような彼女をいざ歌人として調べようとすると―他のアイヌ文学者も同様に―なぜか各種日本文学辞典から日本文学史にいたるまで、ごく最近の、短歌辞典にも出ていない。各社の近現代日本文学全集などは、作品はおろか記述そのものがない。

明治以来の、主として日本語による「現代アイヌ文学」の、このような抹消・消去は、偶然のことではない。ここには、中曽根康弘そっくりの政治的な「国民国家」像を投影し続ける「日本文学」の枠組み、またアイヌ文学といえば、アイヌ語で、「古代」に属する伝承詩歌だという、ばかげた固定観念の問題があるからだ。(拙文、北海道新聞四月十三日付け「読む」)かてて加えて、ジェンダーの議論とも関わりあうことだが、おそらく、いま述べた「女性史」における「パルチザン(*3)」(「抵抗歌人」)という評価の問題も無関係ではない。なぜかといえばこの見方によって彼女の歌のオリジナリティや面白さは閉じ込められてきたからだ。(なお、筆者は岩波の「図書」七月号で、彼女の歌を与謝野晶子と比較し、再評価を試みている。クイズになっているので挑戦してください。)

ジェンダーの問題といえば、幸田露伴(*4)などがアイヌ民族を文学化するとき、絶えず「女性」として表象しているという典型的なオリエンタリズムの問題がある(内藤千鶴子)。アイヌ民族は「女」として表象され、男性たる「和人」の欲望にさらされる。このようなことは文学のみではない。「現代のアイヌ観」にしても、同様なことが言える(児島恭子)。そういえば、今年、生誕百年になる『アイヌ神謡集』を残して十九歳でなくなった知里幸恵、彼女は金田一京助の"悲劇の「天才」少女伝説"(『北の人』)以来、「アイヌ」を「代表」させられている。私の「八重子」再評価は、はたしてどうか。

[むらい おさむ・文学科]

---

*1 中野重治(1902−1979)
プロレタリア文学運動の旗手。「夜明け前のさよなら」「歌」「機関車」など発表。プロレタリア文学の指導的役割を果たし、活躍する。

*2 宮本百合子(1899−1951)
十七歳の時、小説『貧しき人々の群』が「中央公論」に発表される。後にプロレタリア文学へ参加し、戦時下の弾圧にも屈せず過ごす。

*3 パルチザン
労働者・農民などで組織された非正規軍、別働隊、遊撃隊のこと。

*4 幸田露伴(1867−1947)
詩人的思想家、小説家、国文学者、中国哲学者、中国文学者。『露団々』の小説を発表。小説『風流仏』、『五重塔』史伝に『頼朝』『平将門』、戯曲に『名和長年』詩集に『出盧』『悦楽』『運命』『仙人呂洞賓』

海外情報
アメリカにおける女性学の変容とそのポリティックス

リンダ・ホワイト

アメリカの女性学の中での変化は批判によってなされました。批判、とりわけ主に白人の女性のための白人の女性についての学問や運動であったということの批判がもっと虐げられた女性たちからあがりました。第三世界の女性たちからも批判が浴びせられ、新しい支配とか権力についての新しい理論を作り出す必要性がだされました。また、グローバル経済という観点から、アメリカ女性の平等ということを単にアメリカ国内だけで語るのではなく、もっとグローバルな流れや構造の中で語る必要が出てきました。

その上で、女性を焦点にするところからジェンダーを焦点とするところに移行してきたという変化があります。ジェンダーというのは新しい概念ではなく、1960年代70年代には女性たちは理解していた。女性という言葉が使われなくなって女性学でもジェンダーという言葉を使うことによって、女性を焦点にしてこめられていた政治的なものやフェミニズムといった思想や運動があいまいになるという問題があります。

（アメリカの女性学というと非常にパワフルですごいと言う印象があるが、）今アメリカの女性学は非常な危機に瀕している。アメリカの中で一番強力で一番最初に作られたワシントン大学の女性学を見てみても、1970年に創設され、やっと96年に女性学部というのができます。大学でも女性学の中で人種差別に関するさまざまな衝突が起こっています。今アメリカの大学では、さまざまな違いや人種的民族的違いにとてもセンシティブなウィメンズスタディズが普通になっています。

＊7月に行った研究会をまとめたものです。詳しい内容についてはウェブ上、イベント情報にて報告します。

7月9日の研究会にて撮影

秋のイベント案内

詳細はチラシ・ポスターをご覧下さい。

◆メディア＆トーク◆

一〇月二日(木)午後六時～　G112にて

ロバート・リケット　ビデオ『エイズと共に生きた二人』(米)

普通とはちがう恋人関係のあり方と家庭、家族、友人たちなど、取り巻く関係について話してみましょう。

◆パフォーマンスアート◆

一〇月十五日(水)午後予定　J104にて

イトー・ターリ『恐れはどこにある』

社会がセクシュアルマイノリティをどのように捉えているのか、その状況に言及しています。パフォーマーのからだの揺らぎや振動、その意図するものを、からだを通して感じとってほしいと思っています。

◆講演会◆

十一月十一日(火)午後四時三十分～　G112にて

蔦森樹『性は限りなく実体のふりをした可変概念である』

＊この他にもメディア＆トークや講演会など計画中です。大学内掲示や配布物、ホームページをチェックして、是非ご参加ください。

本棚から

『フェミニズムはみんなのもの』

ベル・フックス著／堀田碧訳　新水社　2003年

本書は、フェミニズムや人種、階級、文化の問題をめぐって、いま、もっとも注目される思想家の一人であるアメリカの黒人フェミニスト、ベル・フックスが、30年間のアメリカのフェミニズムを振り返りながら、未来へ向けて放つ熱いメッセージ。そこにある「フェミニズムは一部エリート女性だけのものではなく、男性を含むすべての人のためのものだ」という明確な主張は心地いい。一部の専門家向けの理論書でなく、誰にでも読める文章で書かれているのもその姿勢の表れ。ラディカルで愛にみちた、未来に向かって開かれたフェミニズムがここにある。

＊ジェンダーフリースペースでも扱っています。